



8月14日 安曇野花火

これからも受け継がれる思い「安曇野は、ひとつ」

安曇野の夏の風物詩「第18回安曇野花火」が本年も盆の夜空を彩りました。

合併後間もない頃、5町村の垣根を取り払い安曇野市を一つにするきっかけとして、「安曇野は、ひとつ」をテーマに開催された安曇野花火。合併前は多くの地域で花火大会が行われていたこともあり、「それぞれの地域で行っていたイベントなら協力し合えるのでは」と企画されたのが始まりでした。

初代実行委員長の会田さんは、「毎日のように打ち上げ場所へ行き、住民の皆さんに協力を依頼した。がむしゃらに奮闘した」と当時を振り返ります。フィナーレを迎えた帰りに、感動の涙を流す人や握手をしてくれるお客さんの姿が、会田さんと実行委員の原動力となり、18回の歴史につながっています。現在は宮下さんが実行委員長を務め、「安曇野花火に込められた多くの皆さんの気持ちとプレッシャーを背負って毎年準備しています」と語ります。

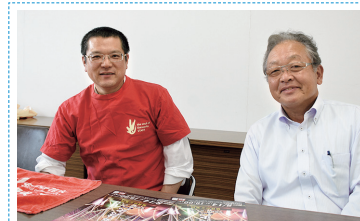
そして今年、安曇野市制施行20周年の節目を迎えた本大会のテーマは第1回と同じ「安曇野は、ひとつ」。同大会のために花火を作り続けている有限会社伊那火工堀内煙火店の村上淳さんは「毎年大会コンセプトに沿うように、非日常のひとときを楽しんでもらえるよう丁寧な作り上げています」と話し、一つ一つ心を込めて4000発の花火

を作る様子を説明してくれました。飯島町の中田切川のほとりにある堀内煙火店の工場。ここから安曇野の夏を彩る花火が多くの職人の手によって生み出されています。

地域の絆とそれを支える人々の誇り、そして、花火師の思いを乗せたアニバーサリースターマインが打ち上げられた第18回安曇野花火。「地域に足を運ぶこと」を大切に続けられ、今では地域のバックアップ体制とともに歴史を未来につないでいきます。



打ち上げの合図をする村上さん



会田恵司さん(右) 地元恵司さんと企業の皆さんの協力とお客さんの喜んでいく姿があったから今があります。 宮下雅士さん(左) 第1回からの積み重ねとバックアップ体制があって、安心して開催できます。



へこれハ昔々の物語じや
この平野で皆が
平和に暮らせるのも
犀龍小太郎の
御陰なのじや
そろそろわしハ
長峰山に戻ろう

8月23日 信州安曇野薪能

創作能・犀龍小太郎 安曇野の夜に舞う

13年ぶりにスペクタクル能を上演 かがり火と共に未来を照らす。

——松本盆地はかつて大きな湖でした。人間の子として育てられた犀龍と白龍王の子・小太郎。成長した小太郎は、母・犀龍と再会し背に乗り山を突き破り湖の水を日本海へ流し、人々が暮らせる平野を拓きました——。

夏の夜、揺れるかがり火に照らされながら、信州安曇野薪能で「犀龍小太郎」が平成24年以来13年ぶりに上演されました。この作品は能楽師で名誉市民の故青木祥二郎さんの長男・青木道喜さんが平成12年に薪能10周年の記念として創作したオリジナル。初上演から17年の時を超えて、市制施行20周年の節目に郷土の民話を原作にした作品が披露されました。

今回、主役の犀龍小太郎を務めたのは青木道喜さんの長男・真由人さん。「今までは、父や先輩方が演じる能を支える立場でしたが、今回この作品で初めて役を演じました。父が作ったこ



開演前にほほ笑む 青木道喜さん(左)と真由人さん(右)

信州安曇野薪能は、市民ボランティアの皆さんの手によって運営されています。当日は、会場設営や駐車場案内、受付などに汗を流す地域の皆さんの姿が見られました。

20周年の節目に「文化の継承と地域を支える力」が融合した舞台で夜空に舞う小太郎の姿が安曇野の未来を静かに照らしました。